日本一品

東京土産

初篇

柳田文庫
文庫11
A1910

風頼亭飛龍戯著

日本一品東京土産　初編

文庫11
A 1910

燦々閣藏版

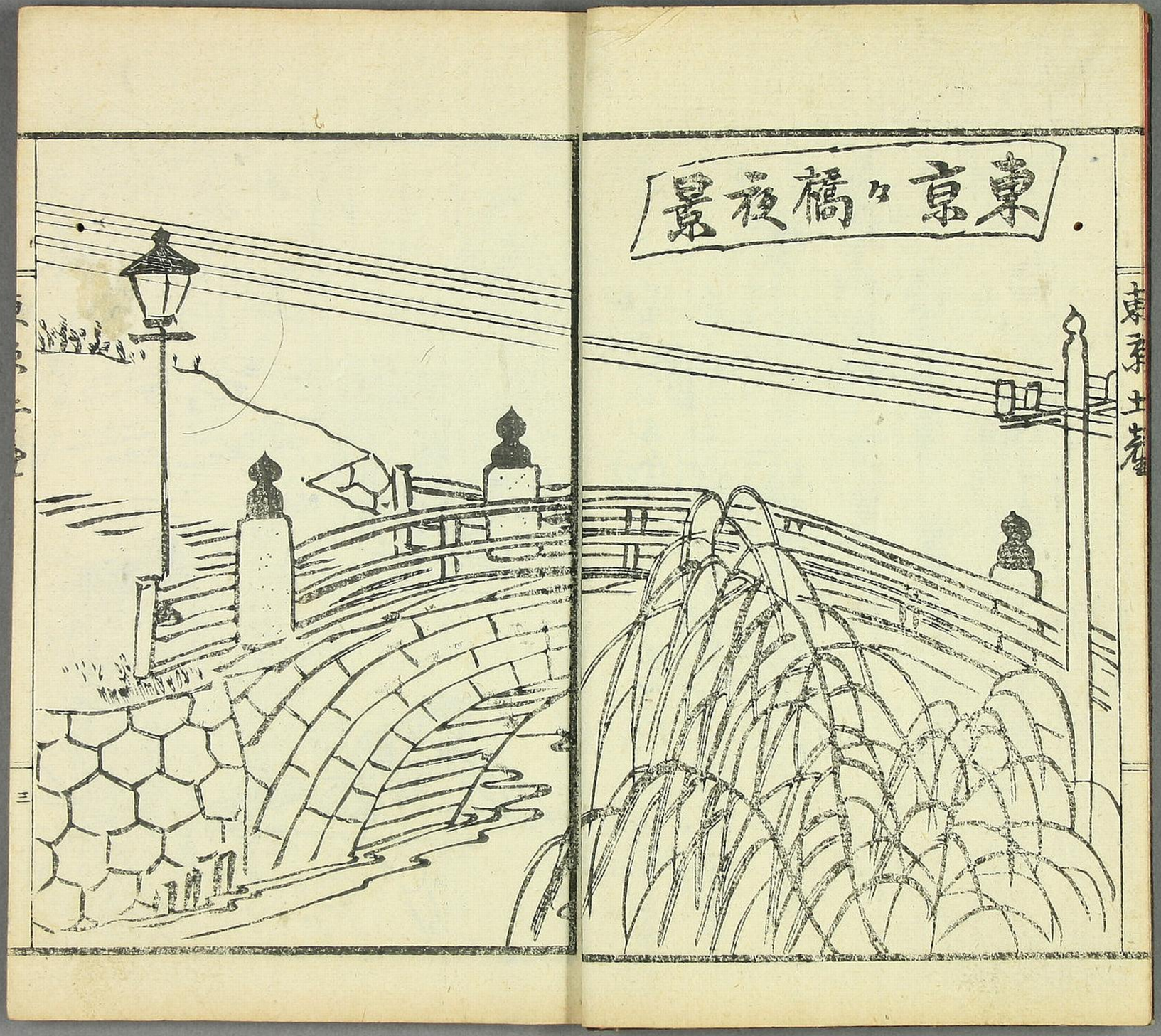
自序

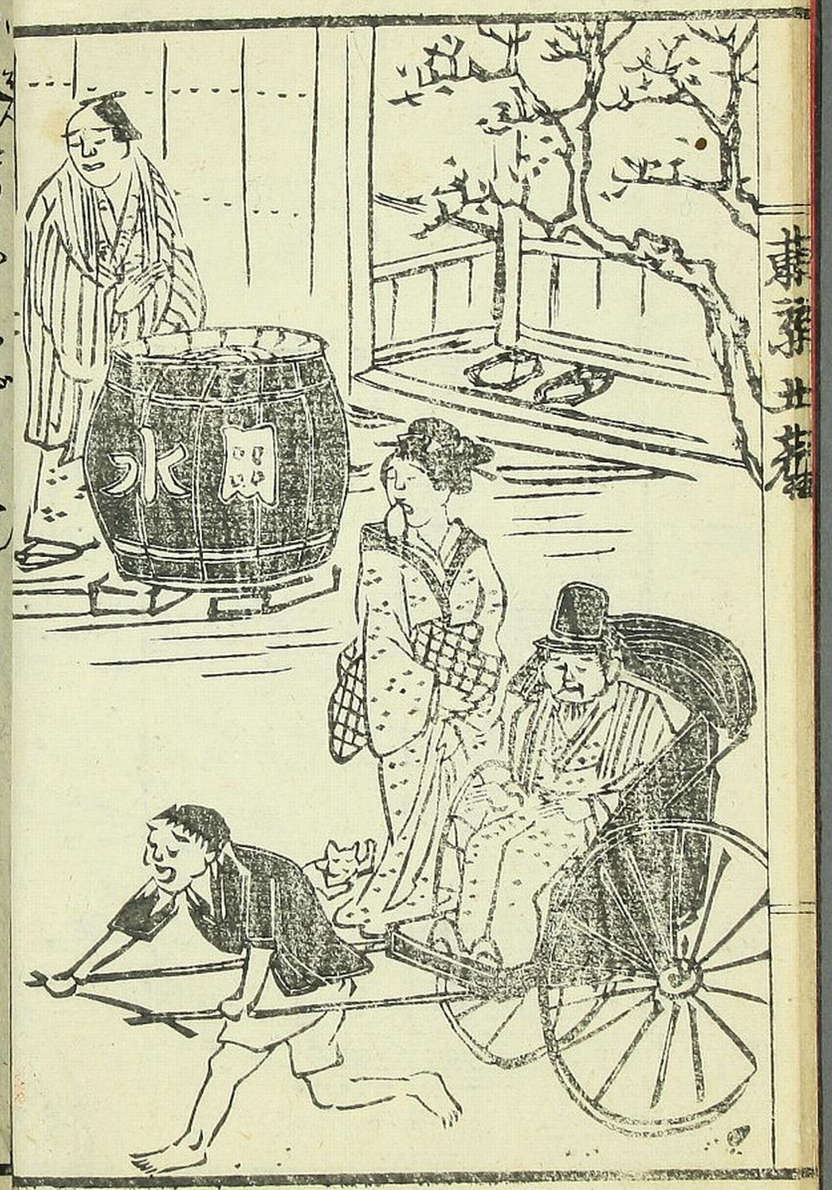
人情と義理の時に強つて稱うつるとも
一人いひしらるや冥ふるの家の家
ハ指折り數へ早や一年もしまの大
屋にあるまことを以て新人の人情居
日に移り月に変りこれと大江戸の時に江
すを見べ月とすつぽん味噌屋平さま

248-83197

ひとけたり今や二百年の一書生国すり
人情や風俗の移り変りを知るもの
ふる程ど目に見る事にはなはだしきに
事と大なる事とは見れども思ひ出で生録
第の一理を抜き出で寫さんとおもふ
て鉄舟流にあらず北斗無果て生
名を負ひて四方の学者の

ありて賢愚の品位と世間の編者のかい
はいなどの事柄を編集第二編と
引続き冒頭を編んとす
あまつて申すにふん
明治十三年 家自中院
[illegible]


東京の橋夜景
東京土産



一つ品　東京土産初編

東京　風頼亭飛龍戯著

○鬚様

馬車のもつる喜ガラ〳〵馬丁の声ハイー〳〵中の鬚さまい鼻の下に八の字のひげを生やし羅紗の洋服をきて車内せまし〳〵と御座ます〳〵朝の九時に邸をいで宮城の三時より退社頼て歌舞伎に乗り一番らるれば帰りの案内とゆくも

奥へ打通り可レヨ衣服をもての仰せ侍ふ後愛
妻がうしろより着せ掛ふする名物を召し細君
に暇を長下させて手傳書齋に入り物の中なる淡
てれいする内早くも柱時計チンくと七時を告げれば
夕膳にむかひ一杯きこしめすわら醉の酒掌燭
愛妻や侍婢おどだ打戯れなどして興じさせる
れ酒のまうるに隨ひ不圓思ひつけらるく事やあ
りけん同月日暮てれられぬ用ありて生沢方

まで暇ならねばなりぬ四人奔太車夫の名に支度をさせ
裏門にまらせよとじみふる衣類に着かへ
シャツプを着り細君がすこし苦みたる顔をして飯
をと勧るをも顧こまれぬ忍びやうに裏門へ立
いでられ暇をに小多で伺の如へと身うち拵ばさ
ゝや香や手傳家門のうだし柄橋の方
角よむらひ人力車の梶をあぐるしがラくく
痛耳にこづを喰つて大ぶるどろひて吠る聲ワ

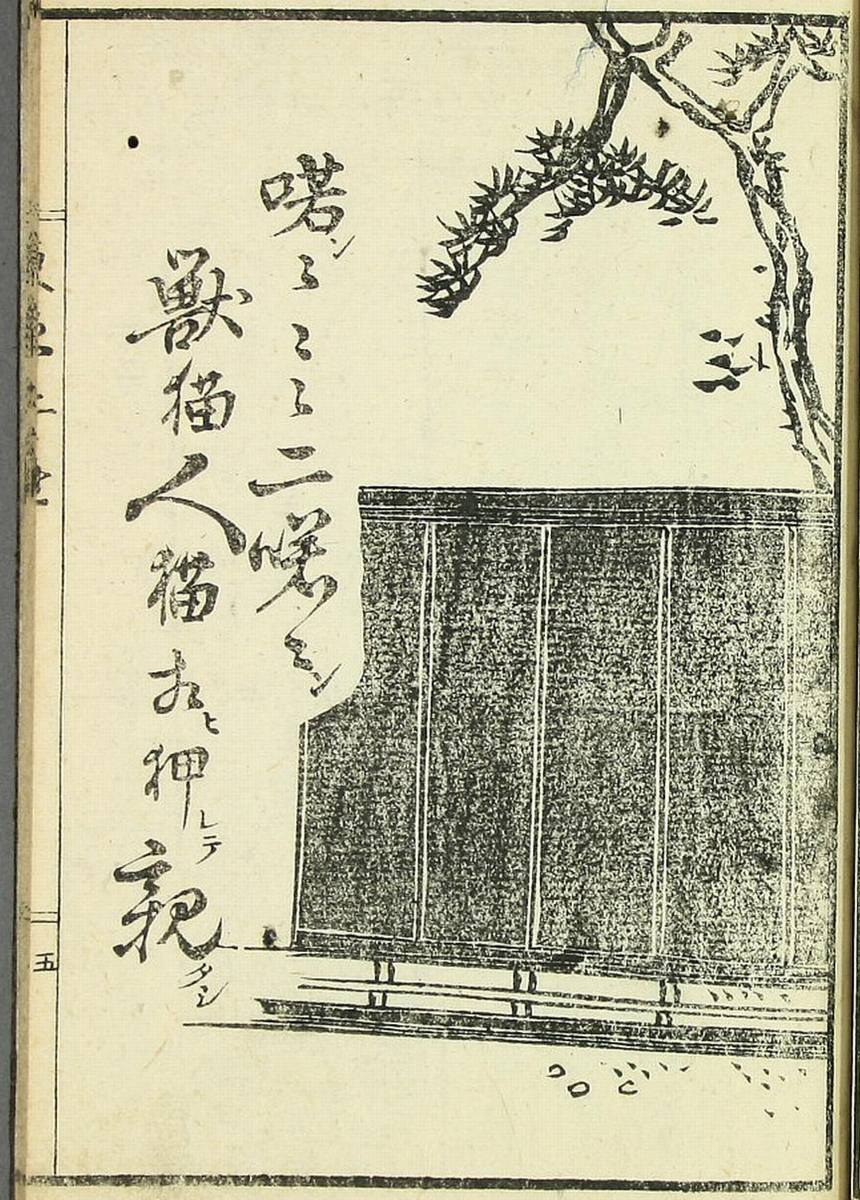
東海道中膝栗毛
東海道中膝栗毛
弟子ヲ見テ
ヒヤ行ヒ
那ガ
居ヒヤ
月ヲ

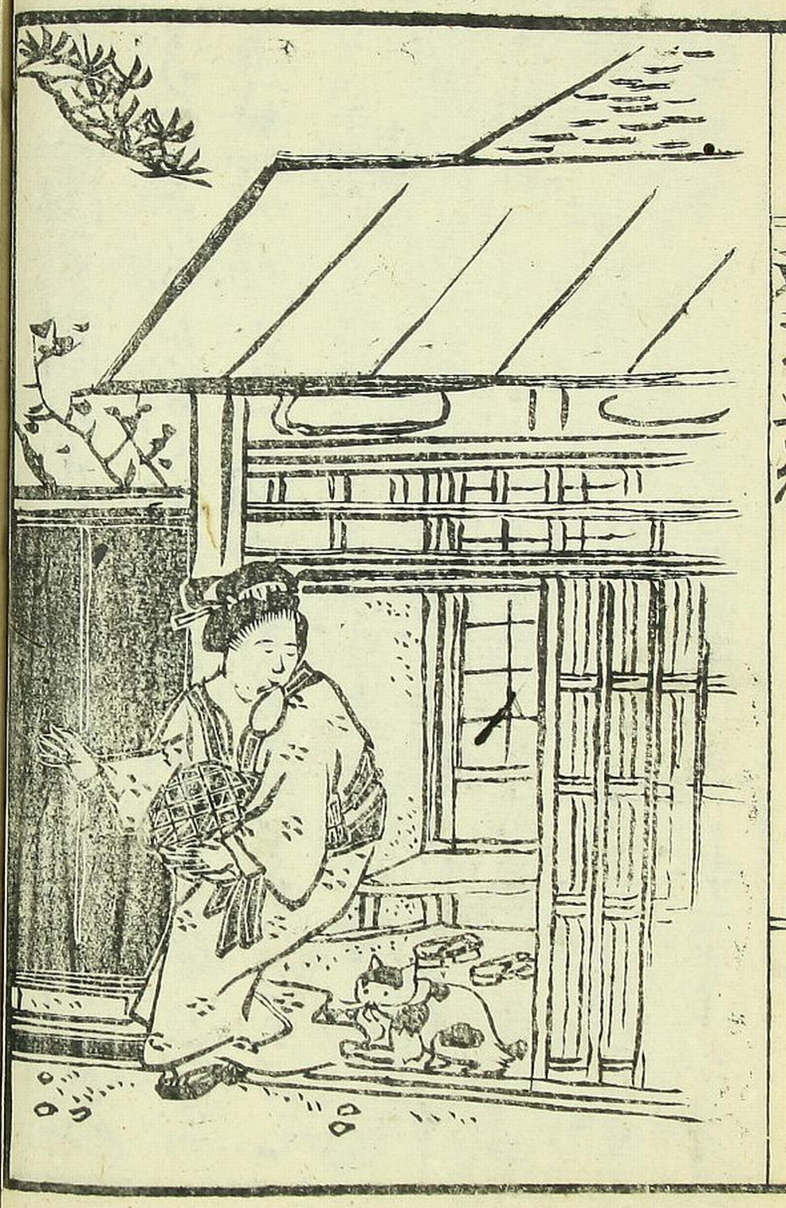
ンくゝく　奔走蓄生めと鏑ごゝふぐら猫のうち
で且つくの生ハ似ガ三月でよゝて見さゝものだナア

○寝兒

二間半の冨口よ格子戸をふけ又鄙ゝの松ハヒヨロ
くと長びチンさりと意ゝ意ゝまな構ハこれホん当時
流行の寝兒の家まて主派ふる神柳に金物的
神ふゝ鮫の神ゝをふゝぐ拭きまゝ者ゝ多ゝ火
鉢を来ゝ火鉢のうゝに三味線を二挺ゝどつゝ座

敷い二階ゝき二間ゝひゝて日向に狗の飼猫ガ毛ゝつ
うひ寝ゝきゝんハ方後と差向ひ相を変ゝぬお客の体ま
様一向毎アタベハ夜アノ騒ガ冨のホラ何とかいつなつけね
エと少ゝうんゝそうゝく騒ゝ助ゝかゝふゝゝが腰膝手鉢
ちゝひか船宿ゝ者ゝ一来ていてね色ゝく口説ゝのサアンナ薄襦
以ゝ蓋隆ゝ奴ハモウゝくちりけつゝぽサ薬し時ゝ長ゝの
らだゝふ音釋い気障ふのいゝ住ガゝふいゝガ負的な鍋
舞の舞ゝ月鮫のゝゝな面をてゝ中れ付ゝふゝ女ア


喰ふふふ二喰
獣猫人猫
おと押レテ親ケシ



の子だが嗜とまつ〳〵ねんごやアるいう私きやアるんこう
ま腹がかつて塩ふちやうんごワ四そうういおけふアま腹味
蒙あのハ色ごーだら峠度いて氣だらうと思つて孫
鮫福へあのうーをあげた住ごよ量忌くーひ番ホンニ
ねへ時ロうど番狂せな日い遠ごろありやアー極
ドレ風呂にでのつて心持を直してこようかお母ア甚
平みのシヤボンを出してたんれと厠へいこう手拭掛のあて
拭をまづーてお侵が濱すシヤボンを取り番ホンのの

まうけ出そうとすると猫が落みつかまて泥外
番〳〵エ、ホ〳〵ホ蓄生ごよ格子戸ガラリ年後十
一時の鐘風にたまてボーン

○鯖先生

紙羽どう相ふ黒屋妙の高帽ふよすふし
四ま丈の約りあハぬマンテル、チヨツキ、ぴボン何れも
鶯色のとのまうこる浮袋を差て麿めうく毎ひ
ま世ぬ髭無二三本ま理に神し退ぶけとく四五

人づま〳〵金梨先生ここの方ハ西洋ものゝ手の法
がわるゝかゝ云ふことを一寸吟江外たゞ先生ふゞ定
めて不日結婚でせう 素〳〵小九君ぞゆうぐんハ指
きゝ〳〵第一僕ぞるハ電信ハふしいつぐ人に先鞭
を着けられるぞうと実にいまゝしい御郷家し
ゝ〳〵間目〳〵ホン三電信といふハ此のたひだ幸ゝ家ゝ
市武拾銭にでゝ胃中といふ人ハ親指をレコの回
数だそうぐ無ぬく 煙草むうり吹〳〵武

相間とハ者雑巾洗ハないゝ蝿〳〵サウくあ
の男ハ素ハの者ハ本ハゝあぞ〳〵美盤ハ素ぞさき
ぞゝふ取どこのあいのだゞエレキのゝ分ハ実ゝ
恐ろゝいものだ古間物早くゝ電信とたゝ
ゝて胃中のゝゝふ株にふゝなゝやゝ酒ハ飲
まゝんせと活〳〵に酒れて出行きつゝふ
ハイ程みみと二人ひきの人力車乗ぞて隊
長様ゆ〳〵嘆〳〵シャツポをとり急ぎ礼をし

土砂降
雨
深シ

ゆうとする柏餅まへり引ぬき狼狽て一人ゞ鼠
つまづきひとりゝ倒れうろと二人とも雨だれの
泥ぬるみのうちゝ顛げる向ふを通るうつくしたる職人
体の男八繼ぎたゝみ足ざまアア極ナア体あやアア何
者だろう無ハ男根もうろぬぐ頭痛まなぶ鼻
断ってる分つてゝふアハ八なぜく無ハ目や泥の
なゝくろぐろたのぐろう云ずと知れく顛どのよアア
ハ、、、

○黠婦

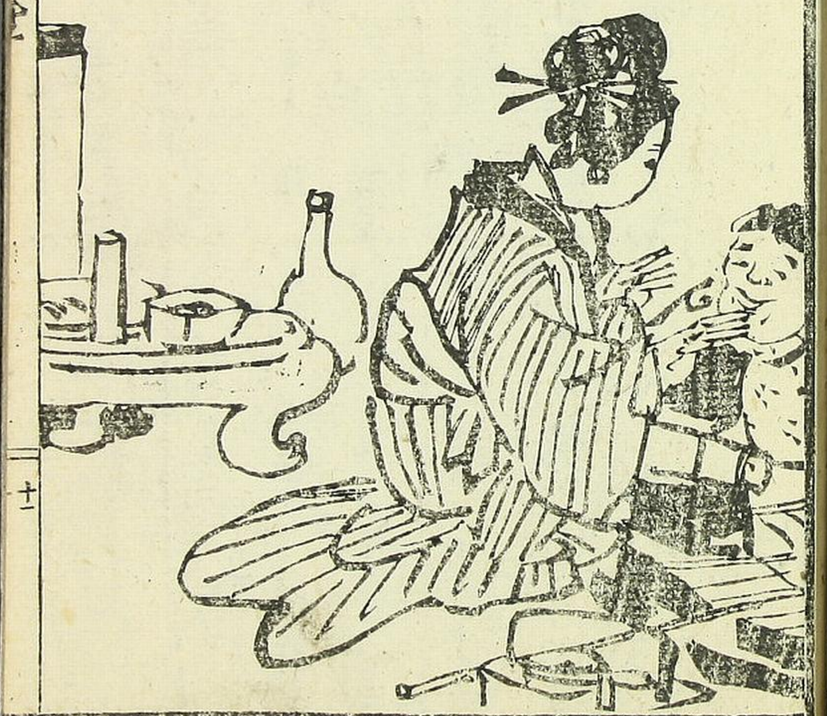
三尺庸圍の上みロひとり敵娼の来るを待ちる孫
尺伸ハ家禮ゝ庶ハ叩ちしバタくなる上の草履
の音をきゝそ家ごとに裡婦人も面やホドれぐきて
居ゝひと獨言まんどうとも世ず暮なるうち明方
近ゝとも思はれバ小癪にさはる下婦めだと客ハ蒲
団のうへにあ乗り家ぐまで帰りて此迄勢に玉ぬふ
んで呉んずと思ふ打ゝの白熊婦ハ障子をあけて

〳〵まあ〳〵ぢきあり客の傍にはまだ客はまさ勝の主よ
口も聞ず主人とするに黙姉いおごろき〳〵あまもん何なよ
〳〵行の客〳〵ごまあ〳〵も行あいの茶屋〳〵帰るのさ黙〳〵アレまだ
夜明なきもし外へんふ客〳〵あゞ明あいだつて嘶きね
〳〵こさいなるめ〳〵黙〳〵ナニがあ元に障つたのやまるふふ
堪忍〳〵どうで宿て下さいなと白魚同様ふふで
抱〳〵めらまき客ハ勿ちぐよやく〳〵客〳〵ナニ何もまま
にさいつさ事も孤〳〵が家のおつがなるふよ黙〳〵サウそれ

とゝ初うぢ見ましいみ今日はあ客ごみあつまの郎
をまりつて夫ふふこと〳〵来て繋ぎり様すこと思つ
ためでツイ遅くあつたんでさアね客〳〵ヘシ甘くいふ
ふ黙〳〵うまきこゝふんどやアあつまきん真實でもと
アあと話しのうちに客ハ又ちとの通り稽異の
中〳〵引込れる黙〳〵何ふさい大方ふこしぶ客くたつ面
のぶ客に障つたんでせうぶ心も知ふふつで真に無ぶす
よ客〳〵果れらア敬ぐおら情郎と様てきてみて

煙草吸ヒ
出ル思ヒ
無量情
眼泪
沙ヲ乗ル

一軒の
小酒屋
に長居
天下
多シ



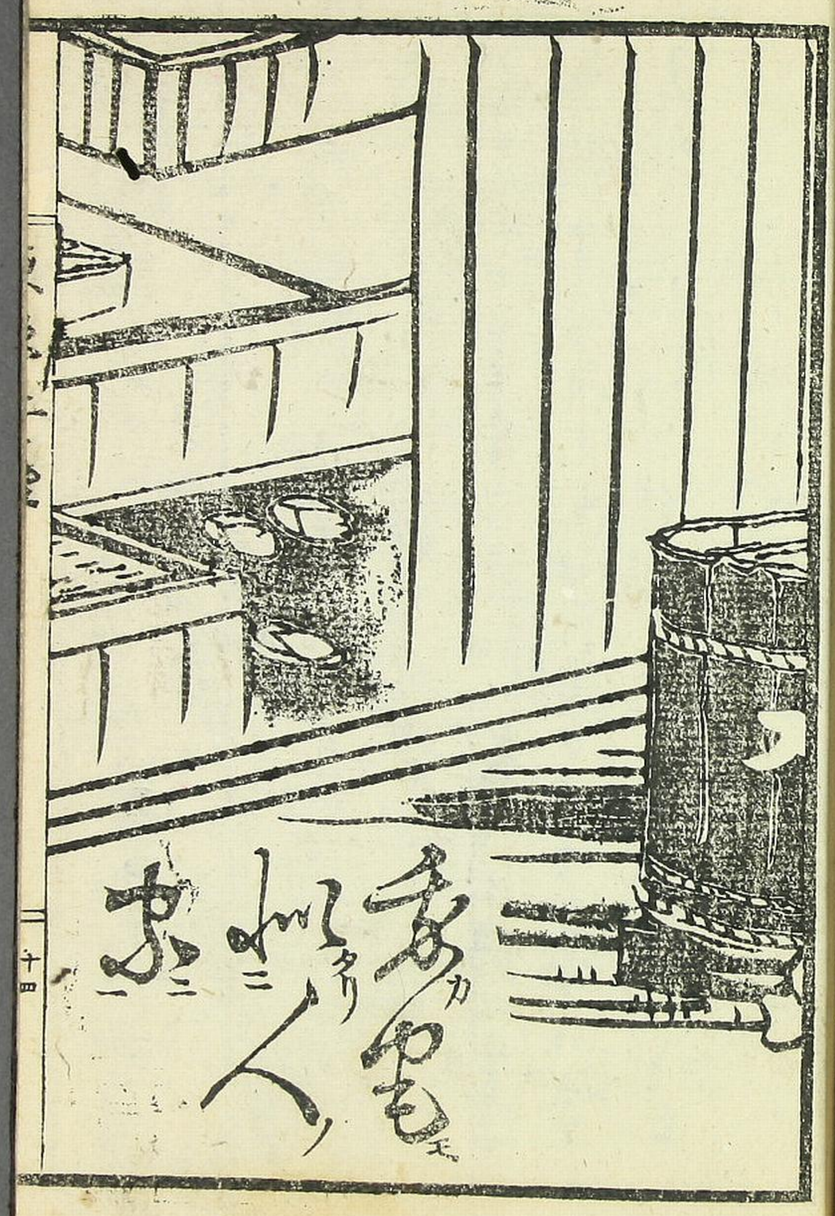
黙「まアおきけなんのこのくいナゼちんぷに通ず
元だろう悔ゑねへと首筋を〆付上唇をチヨ
イと喰つけが蕎麦の腹を三寸ばかり長くし客へ他
さまをとゝ知りあぐらつひ仕れる奴さと目ゝを下
て吸付たばこを呑む黙姉ハ後ろをむひて舌をペ
ロリ又こちらに向き黙「ゴ客とて捨てれもせず
石に書繋とゝふものハマアあまもんの義だぶつひ
ゝのです称へ

○若旦那
高慢の人へ力を風をきつてガラ〳〵と上に乗の
りたるハ〆の頃二十二三の若旦那様流行つむき
の袷物に唐人ちりの羽織を引掛け義兵ゲ
ムペりとした態をして「車屋さんこゝでらし
と横町にゑいこ車を飛びをり家のまへまで来
りしが早や七時ゑたて居もないて居る体に源石ま
きまり悪く遠大ゝ和を躊躇しが箱沢が目早や

人認めこゝろ様子に此方は小藤のふかと手招ぎソツと
呼よせバ若頭は帳場から出まゐり「モシ若旦那あ
なくはマアどうりなすつたので御座れ升二三日もかゝり
てあさらないので大旦那は大怒り今々と今朝
こそ帰つたら今度こそハ勘當極メ致さふと
仰るを私しがお宥め申して置ましたしかしおつかさん
もひどひ御心配サアまアよくお這入なされ共々お詫を
いたして見ませう 若「十二ネ夕べも既に寝る積りで仕

度までしたんだが丁度野良亀粗俊の名をとさん
らまんぐく又一杯とありとうし帰りそくなつた様
サどうぞお前さまへ僕てお袋に謝し親父のまへを
甘く繕つてきてもらへ十吉「そうさやアいまさらおせんおつかア
さんや私しが繕つても僕で承知をなさる大旦那でハ
御座りませんそれに一勝やこぜんの事でハなし罪を
帰あそばせけく貴君がお詫をなすつたがよう御座りませう
せうと云つて頭をとらまへがら若「そいつハげし困るだ

隱家ヲ
天水桶


家カモ
知タリ
人ノ
恵

堂ら伽藍あるめへらす書へ仲書名があるう解ふく
ゆへこんあるものが出来し外向後いチトお惜みあるん
まし名へ惜むとあるく大惜みの故今日の事よいお代
と詩あつてどうら新文が時時ない程よ新むく
とをを合きぬがうり丑番頭い芸実ひへ調にあるさ
ま風りまうしおしきをに法をいつつもやいお母ア
さん丑つ地蓋詩をて年うませうを名へ何分くと
書ぼが傾て新へうの裏くまるる様子をるふぐ

若へろんとうに家の程なの頑愚ふのにも呆れらアむ
こうら地震雷ぢくうら親子とい風駒やじゃア
極へぐハテ解くいつさをめぐナア

一朝廷東京土産初編終

東京土産

日本一品 東京土産二編 近刻

右初編と共に法判豆形覽し極希寓又
三編四編引続き出板いたす

明治十四年三月一日御届出板
同 年四月 東京府平民 仲田豊太郎
下谷区山伏町十七番地

著者兼出版人

定價十二銭五厘

発賣元

東京々橋区九数寄屋町二丁目角

九春社

010190532149